巻 頭 言

「Risk-free」な研究を防ぐための「何故？」

長　　裕幸[1]

まず，この機会をお借りして，土壌物理学会事務局の庶務幹事として，2007 年 4 月から 2 年間における学会の事務局運営に対し，会員皆様のご協力に深く感謝の意を表する次第であります．特に，2007 年と 2008 年に福岡と三重で開催しました土壌物理学会シンポジウムでは，遠隔地にもかかわらず多数の皆様にご参加頂き，盛況の内に終了することができました．講演者の皆様，運営に協力して頂いた方々をはじめ，役員の皆様，ポスター発表者の皆様に心よりお礼申し上げます．また，本号から「土壌の物理性」が A4 版化され，装丁も一新されました．ボランティアでこの作業にあたり，完全版下化にご尽力いただいた方々にも，深くお礼を申し上げる次第であります．

この号の発行をもちまして事務局が移行するわけですが，私自身，事務局に入る前は，本学会活動に対し関心が薄く，単に研究発表を行い交流する場としてのみの認識でした．これは，例えば職場の労働組合と同じで，役員として参加しない限り，その活動内容の詳細を理解することは困難であると思われます．空気のようなもので必要なときだけその存在に気づくといったわけです．会員にとっては，幾つかの所属学会の一つに過ぎず，こだわりが無くても当然なのかも知れません．構成員にしても，専門が土壌物理だといってはばからない人達だけが入会しているのではなく，この分野に幾らかでも関わりがあり，情報を得るために入会している会員が圧倒的多数であり，会員数 460 名足らずで，専任職員のいない，本小規模学会が成立しているわけです．

現在，新公益法人法の施行とともに，全国 1700 学協会では各自の団体区分を明確にする必要に迫られており，その中で本学会は任意団体に区分され，もちろん法人化とは無縁です．しかし，これを機に各学会のランク分けが進み，統廃合，再編の方向に進む危険性は常に存在していると思われます．今後，そのような環境の中で，本学会を存続し，発展させていくためには，役員の皆様における危機認識，会員個々の皆様における，本学会に対する帰属意識といったようなものが不可欠になってくると考えます．組織は，中身の新陳代謝無くして，その存在を維持することはできないわけですが，本学会も財政基盤確立のため，今回，完全版下化に伴い学会誌装丁の全面的な改訂に踏み切りました．これは，その決意の一端であると思います．次期事務局におかれましても，会員に愛される学会を目指して，この変革の荒波に対する舵取りを宜しくお願い申し上げます．

さて，前置きが長くなりましたが本題に入らせていただきます．編集委員長から執筆を依頼されたのは，大学においてちょうど卒研の真最中でした．そこで，毎年の卒論発表（学会の講演会も同様なのですが）を聞きながら，いつも気になっていたことについて一言述べさせて頂きたいと思います．私の所属学科は，旧来の農業工学に属しており，発表の内容は，環境に関する新しい材料や工法といったものが多く，室内および屋外での計測，水質や土壌の化学分析が主体であります．結果は様々ですが，総体に，各研究のスポンサーに対し，成果を強調する意図が感じられます．外部資金の獲得が大学の至上命題となっている昨今，企業や官公庁からの委託研究も多く，ポジティブな成果がもとめられるのは当然でしょう．従って，結論も，研究のメリット (advantage) を強調し，デメリット (disadvantage) な結果は省略する方向にあります．近年，そのような発表を耳にする機会が多くなってきたのですが，いつも頭に浮かぶ一言は，「Risk-free」です．これは，10 年以上前，当時 U.S.Salinity Lab. の Leij 博士が漏らした言葉なのですが，それ以来，脳裏に焼き付いています．実際は，意図的な「Risk-evasion」も多いのですが，せっかくの研究が「Risk-free」から入っていくと，その後の展開が非常に難しそうに見えます．報告書だけならいいのかも知れませんが，実際，論文との境目がはっきりしていないのが現実です．

そこで，卒論発表を聞きながら，「どうすれば同じテーマで「Risk-free」でなくすことができるのだろうか」と考えたとき，ふと浮かんだことがあります．それは，「全ては否定から始まる」ではないのですが，もしその発表がメリットの強調ではなく，デメリットの追求，しかもそのデメリットができるだけ致命的であれば，さらにインパクトは大きいと思うのですが，それに対する解決法の模索となれば，その研究は「Risk-free」と言われないのではということです．いつも報告書を読む際に目にとまる所は，そのプロジェクトのネガティブな面に関する記載です．よく考えてみると，非常に単純なのですが，そこには「何故？」が存在するからです．つまり，動機が「何故？」から始まっているかどうかが決め手なのかも知れません．以前，学会に行く機中で読んだ中公新書「科学者という仕事」に引用されていた，「ふしぎだと思うこと，これが科学の芽です．よく観察して確かめ，そしてよく考えること，これが科学の

[1] 佐賀大学農学部

茎です．そうして最後になぞがとける，これが科学の花です.」という朝永振一郎博士の文章が思い出されます．振り返って，今になっても時間に追われ，「Risk-free」な報告書を書いてしまいがちな自分で，偉そうなことは言えないのですが，やはり「科学の花」を咲かせていかなければと，卒論発表会場で一人反省していました.

若い研究者の方達と話す機会も多いのですが，近年の厳しい研究環境の中，皆，論文の製作に集中しエネルギーを注いでおられます．せっかくの研究が「Risk-free」にならないようにするためには，まずスタートを間違えないこと，「何故？」に立ち戻ることなのではないかと思います.「科学の花」を咲かすのは大変かも知れませんが，まず，芽を育て茎にしていくことから始めればいいのではないでしょうか.

最後に，このような執筆の機会を与えて頂きました編集委員長に対し，心より感謝申し上げます.